

願いを乗せたランタン、どこへ行く？

～台湾旅行で知った観光を支える仕組み～

国際部 三好 祐里佳

先日、初めて台湾を訪れました。台北 101、西門、龍山寺、九份、十分、夜市など、定番の観光地を巡る中で、今回特に印象に残ったのが、十分に体験した天燈（ランタン）上げです。ランタンに願い事を書き、火を灯して空へ飛ばす。十分に代表する光景ですが、実際に飛ばしてみて、ふと疑問が浮かびました。

「このランタン、飛ばした後はどこへ行くのだろう？」

今回は、台湾旅行で知ったランタンの「その後」と、そこから感じた観光地の仕組みについてご紹介します。



図表 1：十分にランタン上げの様子 （筆者撮影）

願いを乗せて空へ飛ばす、十分のランタン

十分では、線路沿いにランタンを扱う店が並び、多くの観光客が願い事を書いたランタンを空へ飛ばしていました。私も 5 色のランタンを選び、それぞれの色に願い事を書いて空へ飛ばしました。

願いを書いている時間も、ランタンがゆっくりと空へ上がっていく瞬間も、十分ならではの楽しい体験です。一方で、空高く上がっていくランタンを見ながら、「あれは最後にどうなるのだろう」と気になりました。

「飛ばして終わり」ではなかった

現地のバスガイドの方から、飛ばしたランタンは山などに落下した後、地域の人たちが回収していると聞きました。そこで帰国後に調べてみると、新北市では天燈紙の回収を促す仕組みが実際に設けられていました。

新北市の公式資料によると、天燈紙 5 枚で 14 リットルの専用ごみ袋 1 個、10 枚でティッシュ 1 包、50 枚で環境配慮型の食器用洗剤 1 本と交換できます。また、提携店では天燈紙 1 枚を 1 元相当として商品との交換や支払いへの充当ができる仕組みも設けられています。さらに、2025 年 5 月までに、観光客・地域住民・商店・清掃隊の協力によって累計 2,030,417 枚の天燈紙が回収されたと公表されています。

観光客から見えるのは、願いを書いて空へ飛ばすところまでです。しかし、その裏側には、飛ばした後のランタンを回収する人と、回収を促す仕組みがありました。もちろん、ランタンを飛ばす以上、環境への影響がなくなるわけではありません。それでも、観光体験を提供するだけでなく、その後に生じるものを地域で回収しようとしている点は、とても興味深く感じました。

天燈紙の回収を促す仕組み

回収した天燈紙	交換・利用できるもの
5 枚	14L 専用ごみ袋 1 個
10 枚	ティッシュ 1 包
50 枚	環境配慮型食器用洗剤 1 本
1 枚	提携店で 1 元相当として商品交換・支払いに利用

累計回収実績 2,030,417 枚（2025 年 5 月時点）

図表 2： [新北市における天燈紙回収の仕組みと実績](#)（新北市政府環境保護局の公表資料をもとに筆者作成）



図表 3：ランタン回収の様子 出典：[新北市政府「天燈升空傳祝福」](#)

日本では「回収を前提」にした工夫

十分のランタン回収の仕組みを知り、日本ではどのような対策が取られているのか気になり、調べてみました。日本で開催されているスカイランタンイベントでは、台湾・十分とは異なる方法が取られているケースがあります。例えば「新潟スカイランタンフェスティバル」では、火を使わずLEDとヘリウムを使用し、ランタンを紐につないだまま浮かせます。終了後はその紐を使って回収し、参加者が持ち帰る仕組みです。



図表4：新潟スカイランタンフェスティバルの紐付きのLEDランタン 出典：[新潟スカイランタンフェスティバル](#)

また、「真如沖縄灯籠流し」では、海に浮かべた灯籠をすべて回収し、洗浄したうえで翌年に再利用しています。

十分では、空へ放ったランタンを地域の人たちが回収する仕組みをつくる。一方、日本では、紐を付けて回収できるようにしたり、使用後の灯籠を再利用したりと、そもそも環境に残さない工夫が見られます。

同じ「願いを灯りに託す」という観光・文化体験でも、その後の環境負荷への向き合い方は異なります。どちらが優れているということではなく、地域の文化や体験の価値を残しながら、その負担をどのような仕組みで減らしていくのか。十分のランタンをきっかけに、そんな観光の裏側にも興味を持ちました。

台湾を歩いて気づいた、ちょっとした違い

ランタンの仕組み以外にも、実際に台湾の街を歩いたからこそ気づいたことがありました。街中ではゴミ箱やトイレを比較的に見つけやすく、旅行者として歩きやすさを感じました。夜市には屋台が並び、食べることが街の日常に溶け込んでいるのも印象的でした。また、お酒が好きな私としては、日本ほど「食事と一緒にお酒を飲む」という光景を多く見かけなかったことも、意外な発見でした。

そして何より印象に残ったのが、人の親切さです。日本から近く、どこか親しみを感じる台湾ですが、実際に歩いてみることで、観光情報だけでは分からない日常や仕組みが見えてきました。



図表5：朝ランニングで訪れた建造物、九份、夜市（筆者撮影）

旅を終えて

今回の台湾旅行では、台北の街並みや夜市、九份など、さまざまな場所を訪れました。その中でも、十分で何気なく浮かんだ「飛ばしたランタンは、その後どうなるのだろう」という疑問が、思いがけず台湾の観光を支える仕組みを知るきっかけになりました。

調べてみると、台湾では地域の人たちが回収に関わる仕組みがあり、日本では紐を付けて回収したり、灯籠を再利用したりと、それぞれの地域に合った工夫がされています。観光客からは見えにくいところにも、その土地ならではの仕組みがあることが分かりました。

海外旅行では、食事や景色、観光名所などに目が向きがちです。しかし、そこで感じたちょっとした疑問を掘り下げてみると、その国の暮らしや文化、地域の考え方で見えてくることがあります。

次に旅をするときも、「楽しかった」で終わらせず、「なぜこうなっているのだろう？」という小さな疑問を一つ持ち帰ってみる。そんな旅の楽しみ方も続けていきたいと思います。